

た く み

Craftsmanship

特集 酒津堤窯 武内真木作陶展
 特集 第四回倉敷本染手織会作品展

第35号

二つの沖縄染織展に学ぶ

「今時こんな美しい布はめったにないのです。いつ見てもこの布ばかりは本物です。その美しさの由来を訪ねると理の当然であって、どうしても美しくならざるをえない事情にあるのだとさへ云へるのです。」

これは昭和十八年三月、柳宗悦が私版本として上梓した『芭蕉布物語』の前書である。

先月、銀座で、染織の展覧会が二つ催された。沖縄の、首里の織物、「宮平初子、吟子展」(九月十二日、二十二日和光ホール)と、喜如嘉の芭蕉布、「平良敏子展」(九月二十三日、三十日、時事通信ホール)である。

この二つの会を見て、その色の美しさに、またその糸の輝きに、そして何よりも技の確かさに感動したのであった。そして冒頭の柳の文章を思った。

日本には各地に名の知れた染織の産地がある。だが今いづれも衰退の一途

をたどる。跡継ぎがない。人件費の安い中国などに外注する。そして着物ばなれである。

しかしこの二つの会場にいと、たとえば宮平初子さんの花織や花倉織の柄の、そして福木や車輪梅、茜、藍の色の鮮やかでたとえようもない美しさに吸い寄せられるのである。それは古くなく、現代的な美しさである。

平良敏子さんの会場の熱気はどうだろう。平良さんのトークがあつたにしても。芭蕉布は何より糸である。先ず糸芭蕉の栽培、糸績み、糸括り、糸染め、機織り。全部で二十数工程の念入りの仕事である。そして数多く陳べられた着尺と帯地、それらが本場に輝いているのであつた。

和光の冊子で、吟子さんは「織物が本当に好きで楽しくて、私の遺伝子の中には「織る心」が組み込まれているのかも」とのべている。戦災から復興した沖縄の染織、その中心を担ったお二人の志と努力を無にしてはならないと思う。

(志賀直邦)

たくみ企画展

酒津堤窯 武内真木作陶展

会期 平成十九年十月二十七日(土)～十一月三日(土・文化の日)

十月二十八日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十二時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)



飴釉スリップ大鉢

堤窯のこと

武内 真木

昭和三十五年(一九六〇)、倉敷市の西郊を流れる高梁川の古い堤の跡に、父・晴二郎が窯を築き「堤窯」と名付けました。

以来、形と釉薬の調和を大切にし、手のぬくもりが伝わるような器を作る

ことを努力してまいりました。

窯の特徴として、釉薬は灰釉を中心とし、倉敷北部でとれる粘土を使っています。成形には「ロクロ」、「型」を用いています。

□ 武内真木 略歴 □

一九五五年 倉敷に生まれる

一九六〇年 父・晴二郎が堤窯を開く

一九七七年 玉川大学芸術学科陶芸を卒業

栃木県益子町の人間国宝 濱田庄司の窯に入門

一九七九年 父の死去のため倉敷に戻り堤窯を継ぐ

以来、食器を中心とした器を製作

二〇〇一年 九月、銀座たくみで個展

二〇〇四年 六月、同右



飴釉コーヒーカップ(皿付)



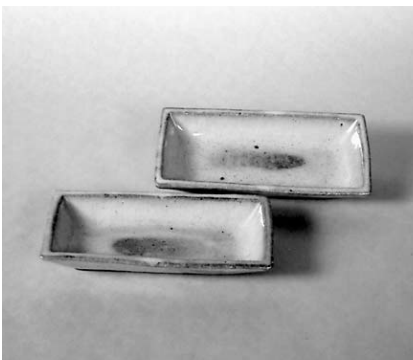
華紋角皿(小)



呉須釉櫛目急須(小)、湯呑



黒釉縄紋手角鉢



糠釉長角皿



掛分飯碗

特別展

第四回倉敷本染手織会作品展

会期 平成十九年十一月七日(水)〜十二日(月)

十一月十一日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)

倉敷本染手織研究所は外村吉之介氏(元倉敷民藝館長)が一九五三年に始めた本染と手織の学校で、民藝館の前の川をはさんで真つ正面にあります。

研究生は毎年六人前後ですが、ここでの一年間の修行を終えて本染手織会に入り、それぞれが制作に励んでいます。本藍などの天然染料と手織りによる確かな仕事をご覧ください。



機織り(上)と
椅子敷の製作風景

「二期一会」の

誤解と正解

外村 吉之介

近年、日本人の間で「二期一会」という言葉が度々きかれますが、私の接した多くの人々の「二期一会」はほとんど思い違いで、しかもそれを重大なことのよう言われるので、困らされることが多いのです。

思い違いというのは、一生(一期)にただ一回(一会)という考えです。たとえば弘法大師千五十年祭は一生一度の出会い、この人と今会うのは今生最後の出会い。珍重な道具をだして、またと繰り返せない催しをして、一期一会の茶会などと思うことです。

「二期一会」の真意は、そのような一生一度の感動や、繰り返せぬ物事への感傷的な詠嘆ではありません。「二期一会」というのは、柳宗悦の「心偈(こころうた)」にあるように「今ヨ

リナイ」という覚悟なのです。それを聖アウグスティヌスは「神の千年は一日である。一日は今日である。今日は今日である」と言いました。繰り返す毎日、繰り返す仕事、繰り返す出会いこそ、度毎に重要だということです。生涯の中の特別な一回を大事に思うのではなしに、何度でも一度一度を今ヨリナイ励みとせよと知らされます。

私は近年、近郊のある寺に頼まれて度々話しに行きます。度々ですから「同じ話で変り映えがしないので」と断りますと「私どもの宗旨では強聞(ごうもん)といって、何度同じ話を聞いても張り切つて聞くから来い」と言ってきました。私は今ヨリナイ思いで行つて話しをします。この宗旨には昔から信心の立派な人を「妙好人」と呼んで敬つていますが、堺の(今の大阪府)にいた吉兵衛という人もその一人です。吉兵衛さんの家内は年を寄つてから半身不随の身体になりました。それで吉兵衛さんは毎日、便器を運んで何度

も繰り返して世話をしました。すると近所の人たちが同情して「毎日何度も大変だ、うんざりするね」と言いますと、吉兵衛さんは答えて「いや、私は一べん一べん仕始めの仕納めで、やりなおしはない」と言つたのです。この言葉こそ、真によく「二期一会」の本当の心を示しております。

私は子供の頃「ほととぎすほととぎす」とて明けにけり」という句をきいて、この鳥が一晚中人を待たせて鳴かないように思つておりましたが、後年「ほととぎす何時きくとも初音かな」という句を知つて目が開けました。

この句は、ほととぎすの声の新鮮さを唄つたように取つてよろしいけれども、実は聞く人の態度の新鮮さを示しております。ほととぎすが一声また一声と鳴くのを、この人は「聞き始めの聞き納め」のように聞いて、明けに及ぶまで一声毎に初音なのです。昨日出会つた人に今日また出会つても、始めて会うように会いたいものです。

芹沢銈介の型染カレンダーと「東西の暦」考(二)

志賀 直邦

前号に芹沢版型染カレンダー刊行の背景と、その特質についてのべた。

型紙を用いて和紙に染色を施すという手法は芹沢銈介の独創である。版を使って輪郭や模様を摺る合羽刷りや、木版に丹緑の絵具で彩色した丹緑本は江戸時代に盛んであった。

芹沢の戦前の名作「絵本どんきぼうて」(昭和十二年)や「法然上人絵伝」(十六年)も合羽刷りで、その格調と気品ある美しさは国内外に高い評価を得た。しかし戦後の物語絵は、「極楽から来た」をはじめ、すべて型染である。芹沢は晩年、自らのカレンダーを絵暦とよんだが、その言葉のもつ庶民性が、彼の作品のもつ日本的な美しさをよりきわだたせている。

さて、ここで私たちは世界の暦の成立の事情や、日本の暦の歴史について

知っておくことも必要であろう。

世界の暦とその成立について

古代の西洋文明は、紀元前(B C)四〇〇〇年ごろのシュメール文明から、クレタ、エジプト、ギリシャ、ローマと続くが、暦について特筆すべきは、B C四四年のユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザー)による暦の制定である。これはユリウス暦といわれ、一五八二年にローマ教皇グレゴリウス十三世によって改暦されるまで、実に一六〇〇年以上にわたって西欧社会で用いられてきた。このユリウス暦は一年を三六五日と六時間とし、四年ごとに一日の閏日をおいたものといわれるが、これを太陽暦によって計算し直したのがグレゴリウス暦である。

ユリウス・カエサルによる制定の意

義は、ローマ帝国による地中海から西北ヨーロッパ(ガリア、ゲルマニア、ブリタニア)の征服である。これによりローマ帝国勢力圏の社会規範の統一が求められたからであった。

ユリウス暦制定以前の暦については不明だが、カエサル自らの執筆による「ガリア戦記」(B C五八〜五二年、岩波文庫)の「北方諸族の討伐」の中で、ブリタニアから大陸に戻るのに「秋分の日も近く、船も丈夫ではないので、冬になると航海ができないと考えた」と記したのは、当時、立春、立秋や夏至、冬至などの条理がよく知られていたということであろう。

アメリカ大陸では、一二〇〇年前のマヤ文明の時代に、すでに天文観測が行われ、一年が三六五日と四分の一であることを知っていた。南メキシコのチャムラの方位暦の遺跡によると太陽と月の運行(東アジアと違って時計と反対回り)を軸に、夏至と冬至、農繁期(種まき、収穫)、農閑期、祭りの

時期など、あらゆる行事の時期を測つた。

インカ帝国でも同様であつたが、とくに山岳の聖地マチュピチュでは、壁に設けられた穴を定点として、そこから日月や星を観測して暦を作つたことが知られている。

インカ帝国の信頼できる記録としては、スペインの貴族カピタン・ガルシラーソ・デ・ラ・ペーガと、インカの王女チンプ・オクリヨの間の子、象徴的に「最初の混血児」^{メステージ}とよばれたインカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ペーガによる「インカ皇統記」（岩波文庫）がある。彼の記すところによると、インディオたちは太陽の運行の周期が一年であることを知っていたが、彼らは自然哲学よりも占星術に関心を払っていたという。また夏至や冬至を測るためにクスコの東西にそれぞれ八個の塔を立て、日の出、日没時の測定で至を確定していたと記している。

インカ帝国をはじめとするインディ

オの人々は、スペインによる征服後キリスト教徒に改宗したが、決して本来の土俗的信仰と習慣を捨て去つた訳ではない。今でもメキシコなどで、アステカ風の絵暦が売られていることからそれはわかる。

ところで古代ペルシャやイスラム、ヒンドウーの社会では暦はどのように作られていたのだろうか。詳しい資料は見えないが、これらの地域では古代より深い相互交流があり、またギリシャ文明の影響も強く受けていたことから、やはり太陰暦に基づく暦法で共通していたのだろう。ある書に、マホメット暦もこの類いとある。

さて、中国の暦法だが、古代よりの群雄割拠の時代には、周、楚、魏などそれぞれに暦法を定めていたと推測される。しかし紀元前二二一年、秦が全土を統一し始皇帝が即位したことによつて、中央集権的専制君主制がはじまり、全土に郡県制度がおかれ、さらに統一的な度量衡制、貨幣制、暦法が

定められた。有名な焚書坑儒^{かんしょくこうじゆ}が行われたのはこの時である。

しかしこの後、劉邦、項羽ら諸王が立ち、秦は十五年にして滅ぶ。いわゆる三国志の時代である。そして劉邦が前漢を興すが、このあと易学が興隆し、焚書された儒学も再興されたという。倭の邪馬台国の女王卑弥呼^{ひみこ}が魏に使節を送つたのは、それから四百年余りも後のことであつた。

日本における暦の歴史

わが国では推古天皇の時代（五九三〜六二八）に百済僧観勒が暦本を貢し、書生がついて暦法を学んだといわれ、百済を通じて中国の太陰太陽暦が入つたことを示している。しかし確実な暦名の初見は、「日本書紀」持統天皇四年（六九〇）十一月条の、はじめて元嘉暦と儀鳳暦とを行うという記事である。因みに儀鳳一年は唐の高宗の時である。

律令の制度によると陰陽寮に暦博士

と曆生がおかれたとあるが、それ以来わが国では曆道は朝廷(国)の所管するところとなつた。この曆は中務省を通じ、天皇に奏する曆を御曆ごりやくといい、貴族や役所に給するのを頒曆はんれきといった。また中国から伝えられた曆の様式は具注曆ぐちゆれきといつて、奈良、平安時代にくに用いられた曆本である。漢文で、歳位、星宿、干支、吉凶などをつぶさに記し、日毎に二・三行を空けて日記を記すようにしてある。日記帳のはしりともいえる。

この具注曆の遺品で一番古いのは、静岡県浜名郡城山遺跡から発見された天平元年(七二九)の木簡曆もくかんれきである。紙に書かれたものでは正倉院の天平十八年(七四八)のものが知られている。また具注曆に書き込んだ日記でもっとも完全な形で残り、そして内容が貴重なのは、藤原道長(九六六〜一〇二七)自筆の『御堂関白記みどうかんぱくき』である。道長といえは、「この世をばわが世とぞ思う望月の欠けたることもなしと思

へば」の和歌で知られる。

ここで曆の技術的な変遷について記そう。奈良、平安時代には漢文による筆写で、中央では中務省・陰陽寮の曆生たちがこれにあつた。鎌倉時代(一一九二〜)に入つて頒曆がより普及し、仮名曆も作られるようになった。鎌倉末期になると、木版刷りの曆が広く頒布されたという。

南北朝時代から室町時代末にかけて地方でも曆が多く作られ、その普及は著しいものとなつた。この理由は永く続いた戦乱と政情不安で、中央の頒曆が行き渡らなかつたことによる。それと木版刷りや押版の発達によつて量産が可能になつたことも一因であつた。

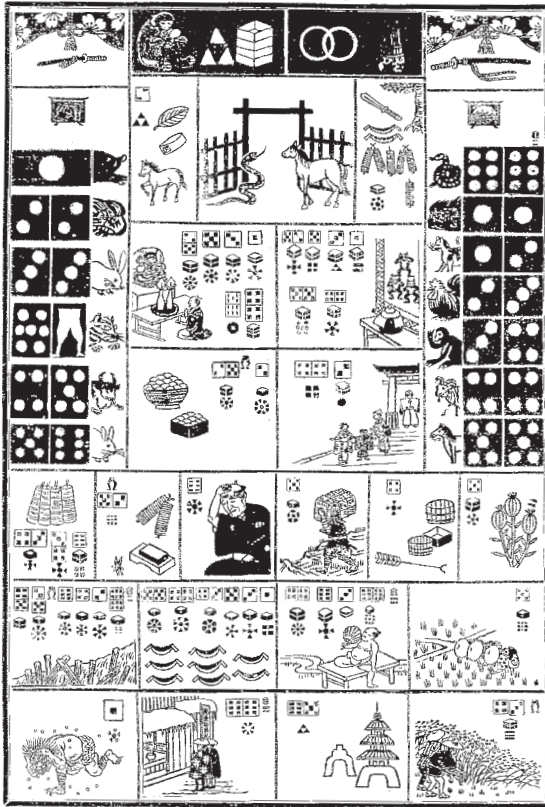
地方曆には「南都曆―奈良」、「伊勢曆―伊勢」、「三島曆―伊豆」、「大宮曆―武蔵」、「会津曆―陸奥」などがあるが、その多くは朝廷の宣明曆せんめいれきにならぬ、様式は仮名の木版曆であつた。当時頒曆制作のための摺曆座があつたことも知られている。

宣明曆とは貞観三年(八六一)からわが国で採用された公の曆で、江戸時代に貞享曆に代わるまで八二三年間の永きにわたつて公式に用いられた。

また三島曆は早くから地方の版曆として知られ、他の地方の版曆の原型となつた。とくに三島大社版は一日毎に境界線が引かれ、仮名の細字で記してある様が、李朝初期の粉青砂器の陶器の象嵌模様によく似ていることから、茶人はこの手を三島手とよんだ。

ところで数多くの地方曆が出ると、それらに閏月や二十四節氣、行事などで違いが出てくるようになる。日本列島は縦に長いから、東北、関東、近畿、九州、琉球で氣候、風俗はかなり異なるのは当然であつた。

この問題に気づき、地方曆による日時のずれや、戦国大名の勢力範囲と曆の頒布域の関連が、天下統一の障害になることを見抜いたのが織田信長であつた。そのころ関東、甲信越では多く三島曆に準じ、また私年号も行なわ



南部めくら暦

れていたという。

作暦権や年号制定権は本来限られた天皇大権の一つであった。天正十年（一五八二）一月、信長は安土城で、近衛前久と陰陽頭土御門久脩を同席の上、暦博士の賀茂在昌と濃尾の暦者と、当年の閏月問題をめぐって対決させた。

朝廷の宣明暦では翌十一年正月の次

に閏月を入れていたが、東国では当年

十一月の次に閏月を入れて一年三六五日としたのである。右の議論は結局、「双方治定せず」ということで、さらに京都で継続協議することになった。

そして六月一日、信長は安土を發つて本能寺に入る。太政大臣近衛前久や

天皇勅使の甘露寺経元、勧修寺晴豊は

じめ多くの公家が参集した中で、信長はこの年の閏月問題を話題にしたという。『晴豊記』は次のように記す。

「十二月閏の事申し出で、閏あるべきの由申され候、いわれざる事也、これ信長むりなる事に候、各々申す事也」無理難題だというのである。

翌六月二日未明（ユリウス暦では六月二十一日）、信長は明智光秀の軍に襲われ四十九歳の命を閉じた。これにより、天正十年閏月問題と改暦の議論は終息に向かった。

暦のグローバル性と固有性について

天正十年一月二十八日（太陽暦では二月二十日）、九州の大名の四名の少年使節が、宣教師ヴァリアーノの引率で長崎を出帆した。ちょうどその同じ月に、西欧では教皇グレゴリオ十三世によって太陽暦（新暦）の採用が公布され、十月から実施されることになった。

この新暦の通告がインドのゴアに達したのは翌年九月。ゴアでの正式な改

暦は一五八三年十一月十四日からという。当時、航海は季節風に頼ったから(日本からの出航は秋から冬にかけて、その逆は春から夏)グレゴリウス暦が日本に伝わったのは一九八四年と考えられる。もし信長の死がなければ、日本の改暦とヨーロッパの太陽暦(グレゴリウス暦)とが深い関わりをもったことも想定されよう。

因みに天正の少年使節、伊東マンシヨ、千々石ミゲルら四名は、ローマでグレゴリウス十三世に謁見し、大いに面目をほどこしたという。

ローマ教皇による太陽暦の採用も、ヨーロッパの大航海時代の到来による東西のグローバル化を背景とする。大型帆船による交易や略奪、そしてアジア、アフリカ、アメリカ大陸の植民地化は、キリスト教の布教と、その価値観の強要という側面を持ち、そして世界的な暦の統一という現象を生んだ。しかしのちに記すように、アジアの多くの地域では、それが日常生活にまで浸透することはなかったのである。

さて、日本の暦は江戸時代後期、幕府天文方によって改良が加えられたが、明治維新によって天文方は廃された。そして新政府は国際関係の良好化、つまりグローバル・スタンダードに対応するために明治五年(一八七二)十二月三日を、六年一月一日とし、太陽暦採用にふみ切ったのであった。

この中心となったのは大蔵省(大隈重信)であったが、これの直接的なメリットは、五年の十二月が実質上なくなったために国家、地方の役人の給与をまるまるひと月分払わなくて済んだことである。国民も意外と素直にこの決定に従ったようだ。

明治六年、改暦とともに官暦から一切の迷信暦注が排除され、十九年暦から伊勢神宮の暦が国家公認となった。しかし改暦直後の暦はイギリスの天文暦を参考とし、太陽暦の日付、七曜と太陰暦(天保暦)の日付や節気が併記され、民衆の利便をはかった。

戦後の日本では暦の出版は自由とされ官暦は消滅した。しかし地方暦の中

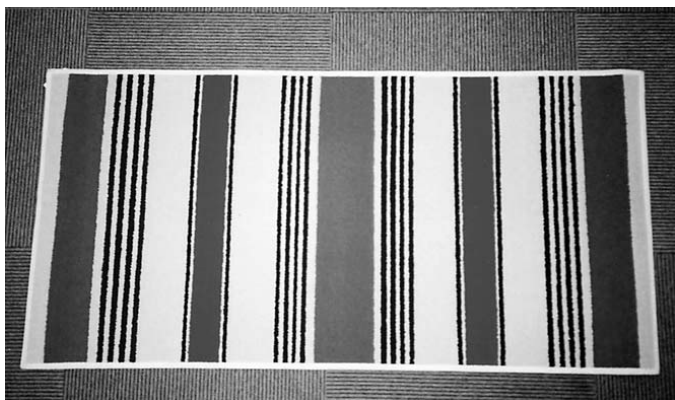
にはそれ以後も地域的に残存し、復刊されたものが明治以降かなりあった。岩手の田山暦、盛岡暦、南部の盲暦、また沖繩の砂川暦などだが、これらは農村の年中行事などを絵や記号で記したもので、今では貴重な資料である。

東南アジアの暦もこれらに近い。タイ国の暦は五種あり、現在の公用暦は仏暦(釈迦暦)である。ただし年代を表し年齢を数え重要事件を覚えるには「十千十二支」を用いている。また時占書があり農事の吉凶を定めている。

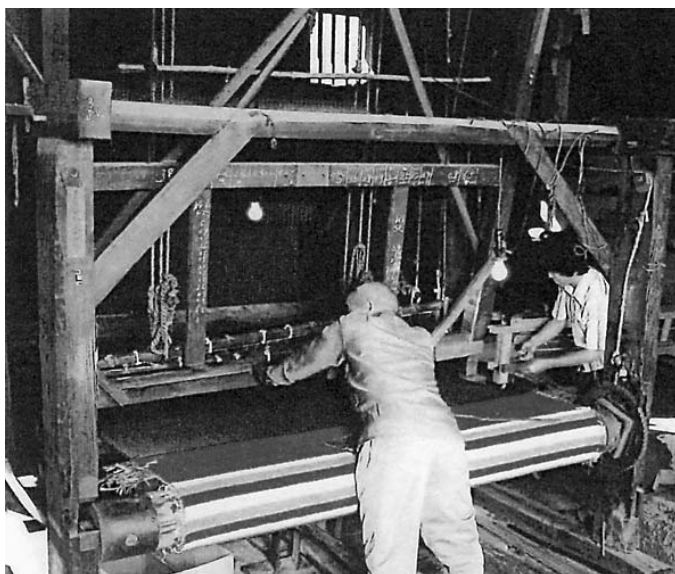
インドネシアのバタック族は暦には象形文字に近い十五種の記号を用いている。またバリ島にも固有の絵暦があるという。

世界の多くの暦とその成り立ちを知ると、グローバルだが単調な太陽暦以上に、日々、月々に意味づけの異なる各地固有の太陰暦のほうがはるかに自然で、人間的なものであることがわかる。そのような視点で芹沢銈介の太陽暦七曜絵暦を見ると、また新たな発見があるのではないだろうか。

たくみ歳時記 倉敷の手織り緞通



玄関マット(60×120cm)

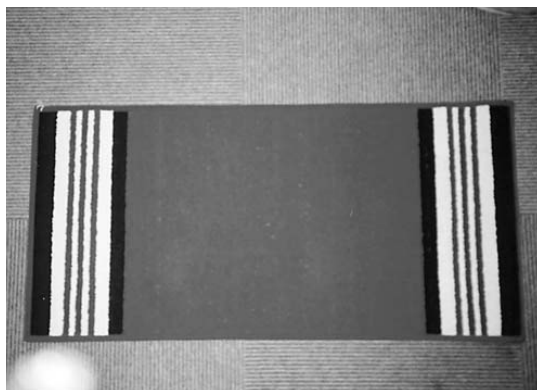


緞通の製作風景

羊毛や絹を材料とした緞通は、日本へも桃山時代あたりから南蛮船で輸入されていた。清朝やペルシア系のいわゆる絨緞だが、今でも京都の祇園祭な

どでその遺品を見ることが出来る。江戸時代になってそれらを模倣して鍋島緞通などができた。しかしこの倉敷緞通はこれらの羊毛、絹系の緞通とはまったく異なるのである。わが国のように湿度の高い国では、乾燥地や砂漠で生まれた動物系素材の緞通は、本来不向きであった。

この倉敷の緞通はその点を克服して、日本の暮しに適したものとしたいつの時か作り出された。つまり日本特有の植物、蘭草(イグサ)を芯として、それに和紙を巻きつけ裏の横糸とする。表にはリング状に紡いだ綿糸を用い、二人がかりで息を合わせて織り込んでいくのである。



ドア・マット(45×90 cm)

イグサと和紙と綿糸、この三つの植
物系の天然素材を用いているから、日
本の四季の暮しに合い、蒸れず、ほこ
りも立ちにくい。

柄のデザインは柳宗悦先生の指図
で、芹沢銈介、外村吉之介両氏があた
り、直線美を生かしながら清楚な美し
さで多くの方々に愛好されている。

制作は高田登氏、最近お孫さんの愛
美さんが後を継ぐ決心をした由。ぜひ
ともお試しいただきたい逸品である。

(S)

□ 倉敷手織り緞通 価格表 □

卓布(三〇×四五)

四、二〇〇円

ドア・マット(四五×九〇)

一、二、六〇〇円

玄関マット(六〇×二二〇)

二、一、〇〇〇円

一畳敷き(九一×一八〇)

四一、四七五円

二畳敷き(一八〇×一八〇)

八二、九五〇円

センターラグ(一八〇×三三〇)

一、一五、五〇〇円

※寸法(カッコ内)の単位はセンチ
メートル、価格は税込価格

あとがき

シーザー(ユリウス・カエサル)の
書いた「ガリア戦記」(岩波文庫)が
結構面白い。ガリア地方は今のフラン
スだが、シーザーの記録するところ
では王と神官(古代宗教)と貴族、騎士
が支配し、残りのほとんどは農奴、奴
隷であった。神官は軍務の免除など多
くの特典を持つため志望者が多く、長
期間の教育を受け、沢山の詩(祝詞)
を暗記する。

ガリアでは日常の記録には公私とも
ギリシャ文字を使っているが、神事
には使わない。その理由をシーザーは二
つあげている。一つは神事と教えが民
衆の中に持ち込まれないため。もう一
つは文字に頼ると記憶力が失われるた
めという。現代では携帯とパソコンが
若者から文字を奪っている。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―一三五六五九

定価 六〇円(税込)